

偽りの恋人は甘くオレ様な御曹司

### プロローグ

「上総くん、相変わらず意地悪ね。そこを通してもらえますか？」

「ああ、悪い、悪い。伊緒里嬢。あんまりに小さすぎて見えなかった」

そう言っつて、目の前のフェロモン漂うオリエンタルな美貌の青年、桐生上総くんはやつと身体を半分ずらしてくれた。

彼は私、瀬戸伊緒里の行く手をずっと阻んでいたのだ。

何度もすり抜けようと試みたが、そのたびに身体をうまくずらされて前に進めなかった。それもそのはず。彼と私の身長差は二十センチ以上。

百五十八センチの私、そして百八センチの上総くんでは体格差がありすぎだ。

私より断然足が長く、尚且つ男らしい体格の持ち主に、小柄な私が勝てるわけがない。

年齢差は五つ。年でも負けている。

そんな私たちは幼なじみという間柄だ。

昔は仲が良く、私を妹みたいにかわいがってくれた上総くんだったが、ここ数年、私に対して意地悪になっている気がする。

なので彼の横を通るときに軽く足を踏むと、上総くんはすぐに口角をクイツと上げて、意味深な笑みを浮かべた。その笑みが意地の悪いものだったので、私は顔を歪める。

だが、彼は不機嫌な私を気にもしていない。

「相変わらず、じゃじゃ馬なお嬢様だな、伊緒里は。余所では模範生みたいに猫を被っているのに、今日はどこかに置いてきたのか？ 探しに行つてやろうか？」

「上総くんだって、相変わらず頑丈な猫を被っているわよね。うまく化けていて感心するわ！」  
会えば減らず口を叩かれるため、つい私も叩き返してしまう。売り言葉に買い言葉がエスカレーターしていくのだ。

上総くと顔を合わせれば、こんなふう言い争いになるとわかっていて。

だから、ここ最近はお会いしないようにしていたのだが、『今夜だけは顔を出してほしいの。上総が仕事で日本を離れることになったのよ。壮行会ではないけど、頑張れって笑顔で送り出してあげたくて。でも、私と主人だけじゃ寂しいじゃない？ だから、伊緒里ちゃんも参加してくれない？ 伊緒里ちゃんの大学卒業のお祝いもしたいし。ね？』と彼の母親に頼み込まれて、このレストランに来たのだ。

そして食事後、『しばらく会えなくなるんだし、二人でお話でもしたら？』となぜか個室に残された。私たち二人しかないから、彼も遠慮がない。

やっぱり、来ない方が私のためにも、彼のためにも良かったのかもしれない。私は深くため息をつきたくなった。

昔はこうじゃなかったのに、どうしてこんなふうになってしまったのか。

『私ね、うちのお兄様も好きだけど。上総くんの方が大好き』

小さな頃の私は、血の繋がりのある実兄以上になつくほど、上総くんが好きだった。

彼と初めて会ったのは、何かのパーティーだったと思う。

上総くんの家は大手貿易会社を経営していて、私の父は代議士だ。そのパーティーには互いに家族で参加していた。

仲良く遊ぶ二人を見て母親同士も顔見知りになり、いつの頃からか頻繁にお互いの家を行き来する間柄になったのだ。

とにかく幼い私は、上総くんに会えると聞けば、会うまでの日数を指折り数えていたほど。

それが、彼が大学生になった頃から突然距離を置かれるようになってしまった。

なぜなのか、その理由を彼に聞いてはいない。

ただ単に私が気に入らなくなったのかもしれない。

そんな彼に、昔のように優しくしてほしいと縋るつもりは毛頭ない。

嫌いなら嫌いで結構。私たちは、赤の他人だ。

今夜が終われば、彼とは当分会わないはず。彼が日本に戻ってくるのは、何年先かわからないらしいからだ。

「向こうでも、その腹黒さを発揮してせいぜい頑張つて？」

「それは、お気遣いありがとう。俺の心配をするより、自分の心配をしたらどうだ？」

「え？」

「婚約すると、母さんから聞いたぞ。婚約者に愛想を尽かされないようにしろよ」

「余計なお世話っ！」

ニヤリと笑って悪態をついた上総くんは、その後、ヒラヒラと手を振って私の前から去っていく。「言い逃げなんて、卑怯よ!!」

ググッと拳を握りしめて彼の背中に言葉をぶつけたあと、私もレストランを出た。とりあえず、義理は果たせたはずだ。お役御免でいいだろう。

「もう、自分、会うことはないもんねーだ」

そう小さく呟いて、胸の痛みには気づかないフリをする。

当分どころか、もう、彼と会う機会はない。

そう思っていた。

二年後に予期せぬ形で再会を果たすまでは――

1

「嵌められた……?」

憤りに顔を歪めて、私は己のうかつさに頭を抱えた。

都内にある外資系ホテルのロビーに足を踏み入れたところで、婚約者の姿を見つけてしまったのだ。慌てて物陰に隠れて息を潜める。

幸いロビーには多国籍の客が数多く行き交っている。

ピアノの生演奏が響くシックで高級感溢れる素敵な空間に、鬼気迫る表情の女が一人。もちろん、私のことだ。

今日の私は、ベージュのフレアワンピースを着ていた。五分袖で、ウエスト部分にリボンをあしらった清楚なイメージのものだ。

そのワンピースのスカートが物陰から出ないように、裾を押さえて隠す。

(どうして、あの男がここにいるのよ!)

心の中で盛大に叫びながら、ロビーから少し離れたラウンジを見回した。

今日はこれから子供の頃からかわいがってもらっている緑川ご夫妻と食事をする予定で、このホテルのラウンジで落ち合う約束をしている。

だが、その相手はおらず、代わりにこの世の中で一番会いたくない婚約者がいたのだ。

着流しに羽織を纏ったその彼は、和風男子とでも言うのだろうか。雅な雰囲気でもコーヒを飲み、周りの女性たちの視線をほしいままにしている。

だが、是非とも忠告させていたきたい、と私は眉間に皺を寄せた。

（そこで頬を赤く染めている女性の皆様方。騙されてはいけません。その男、とんでもないやつですよ！）

そんなことを胸中で叫びながら、私は疑い深くその男を監視し続ける。

身を小さくして柱の陰に隠れると、携帯電話を鞆から取り出した。

電話をかける相手は決まっている。私に嘘をついた人間だ。

呼び出し音を聞きつつ、どうしてこんな事態になってしまったのかとさらに眉を寄せた。

瀬戸伊緒里、二十四歳。世間ではお嬢様学校と言われている女子大を卒業後、都内の企業で働いているごく普通のOLだ。

容姿は、平均並みだと自分では評価しているが、動物に例えるとタヌキ顔らしい。

よく言えば愛嬌があるのだろうか、年齢より幼く見られるのは不満だ。

ショートボブの黒髪で、自分では大和撫子風だと思っている。

性格は……少々堅物で所謂委員長タイプだとよく言われるが、これといって特記すべき点はない。ただ、実家の瀬戸家は先祖代々、政治家を輩出していて、そのせいか古きを重んじる家だ。

私の父も国会議員を務めているし、兄も政治家の道を歩もうとしている。

そんな堅苦しい家の空気が嫌で、私は就職を機に家を出ていた。

そうして手に入れた気ままな一人暮らし生活だが、あとどれくらい堪能できるのだろうか。

現在の危機的状況を目の当たりにし、残り僅かなのだろうかと思ってしまう。

なぜなら、自由に過ごせるのは婚約者と結婚するまで。それが、独立が認められた際の条件なのだ。

父は堅物で融通が利かない人。

しっかりと愛情を注がれているのはわかっているが、押しつけ感が半端ない。とにかく私に対して心配性なのである。

だから自分が厳選した物だけを、与えようとするのだ。婚約者は、その典型だった。

吹き抜けの広々としたラウンジを柱の陰から見つめ、私はため息をつく。

未だに繋がらない電話に苛立ちを覚え、「お父様、早く出て！」と念じた。

緑川ご夫妻との約束は父を通してされたものだ。私は父に騙されたのだろう。

数回の呼び出し音のあと、ようやく電話の主が出た。私は声を抑えつつ、この状況を訴える。

「お父様、これはどういうことですか？ 今日緑川のおじ様とおば様がお見えになるというからホテルに足を運んだのに」

勢い余って声が段々大きくなっていると気がつき、慌ててトーンを落とす。

けれど、イライラがピークに達している私の耳に飛び込んできたのは、このあり得ない状況を

作った犯人——父ではなかった。

『伊緒里お嬢さん、いかがされましたか？ 先生は今、党の本部で会議の真っ最中です』  
電話に出たのは、秘書の坂本さんだ。

父が国政デビューしたときからの秘書で、父の腹心の部下である。  
父の言うことは絶対である彼は、恐らく今日のこの件にも一枚噛んでいるはずだ。

ギリリと歯ぎしりをしたいのをグッと堪え、私は坂本さんに抗議をする。

「なら、お父様じゃなくてもいいです。坂本さんは知っていたのでしょうか？」

『なんのことでしょう？』

なんとも白々しい。携帯電話を持つ私の手にグッと力が入り、怒りのあまり震えた。

口の端をヒクつかせながら、電話口の坂本さんに問う。

「緑川のおじ様とおば様が、私に会いたいとおっしゃっているとお父様から聞いたので、今日ホテルでお食事をする約束だったのです」

『そうだったのですか？ それで、どうなさったのですか？ 緑川先生はお見えになっていませんか？』

本当に白々しい。よくもまあ、この状況でしらを切れるものだ。面の皮が厚いというのは坂本さんのような人を言うのだろう。

父と同じ年齢の彼は、本当に曲者である。これ以上会話を続けたところで、事態はどうにもならない。私は、盛大にため息を零した。

恐らく、私がこうして電話で抗議してくるのは、彼らからしたら想定内。

私の気持ちを無視してでも、婚約者に会わせようとしているに違いない。

『緑川先生がいらっしゃらないのなら、その場にいる方とお食事をしてください』

何も言わなくなった私に対し、坂本さんは業務連絡みたいに淡々と告げる。

『伊緒里お嬢さん。貴女が就職する際に取り決めた約束を思い出してください。貴女が働きたい、一人暮らしをしたいと言い出したとき、先生はちゃんと条件をつけましたよね？』

「……」

『貴女は先生との約束を守るべきです。ここ最近、仕事が忙しいという理由で婚約者である廣渡氏からのお誘いを全て断っていたそうじゃないですか。それでは、廣渡家から文句が出るでしょうし、瀬戸家も面子が立ちません』

おわかりですね、と坂本さんは諭す口調で静かに言う。その言葉の端々に「異論は認めません」との感情が見えた。

『瀬戸家の掟。お忘れではありませんよね？ 貴女は先生に交換条件を提示してきたのですから。』

先生が貴女の願いを叶えてくださっているということをお忘れなきよう』

それだけ言うと、坂本さんは通話を切ってしまった。ツーツーという無機質な電子音が聞こえる。私は小さく息を吐き出しながら、鞆に携帯電話をしまい込んだ。

彼が言っていた「瀬戸家の掟」とは、瀬戸家の人間が守らなければならない決まりを事細かく示したもので、その一つが「男子は政治の道に進み、女子は瀬戸家を守るために家が決めた者と結婚

をする』というなんともはた迷惑で時代錯誤なものである。

兄はこの掟に則って政治の道に進んでおり、私には家が用意した男性との結婚が待っている……  
本当は大学卒業と同時に結婚という話だったのを、必死に説得して期限を延ばしているのだ。  
しかし、就職して二年。二十四歳になった。そろそろ我が儘は通用しなくなる。

私は婚約者の廣渡さんを見て、盛大にため息を零す。このまま逃げ去ってしまいたいが、会わずに帰るといふ選択肢は残されていない。

本当に逃げ帰りたい。会いたくないものは、会いたくないのである。

どうにかしてこの縁談を潰す手立てはないかと色々考えたものの妙案は生まれず、ノラリクラリと彼からの誘いを躲していたのだが……

このまま逃げ帰ったとしたら、父はさらに強引な手段に出てくるはずだ。

そうなってしまうえば、私に逃げ道はない。自由もない。ないないづくしの花嫁街道まっしぐらである。

ここは一つ、少しでも結婚時期を遅らせるため、廣渡さんに会って、相手の出方を窺おう。

私は重い足取りで彼に近づき、ため息をつきたいのを我慢して愛想笑いをする。

「ごきげんよう、廣渡さん」

「ああ、伊緒里ちゃん。こんにちは、久しぶりですねえ」

「え、ええ……スミマセン。仕事が忙しくて」

曖昧に笑ってごまかす私に、廣渡さんは大げさに肩を竦めた。

「だから、前から言っているでしょう？ 伊緒里ちゃん。君は僕の妻となる身なのですから、OLなんてやっていないで、早く我が家に嫁いでくればいいのに」

「すみません……どうしても結婚前に社会に出て、自分の足で歩いてみたかったので」

「ふふ、そういうところは君らしいですね。でも、うちのママが早く結婚しなさいと待っているので、そろそろ仕事は辞めて我が邸に花嫁修業に来てください」

「っ！」

彼の言葉に、私はゾゾツと背筋が凍ってしまう。強ばる顔を無理やり動かして苦笑いを浮かべるこちらには気づかず、廣渡さんは彼の母親の話が続ける。

それに適当な相槌を打ちながらも、私は鳥肌が抑えられなかった。

婚約者の廣渡雅彦さん、華道の次期家元であり、現在二十九歳。見た目は、なかなかのイケメンである。

少々つり上がった目と薄い唇はクールに見えるし、モデルのようにスラリとしていてプロポーション抜群だ。

日常的に和服を愛用していて、それがまた、よく似合っている。さすがは、和の文化に身を置く人だ。

そんな彼は和風美男子と言えなくもない。

しかし、私はこれっぽっちも彼に魅力を感じなかった。

その理由の一つは、彼が極度のマザコンだからだ。それがどうしても生理的に受けつけられない

のである。

廣渡家は瀬戸家の地盤となっている地域の名家なので、私たちの婚姻によりお互いの家を発展させていこうというのが両家の親の狙いだ。

利害関係があるため、私が断固拒否しても破談にはならない。

少しでも結婚の時期を引き延ばす道しか、残されていないのだ。

私が席についてすぐに頼んだ紅茶は、すっかり冷めてしまっていた。

それほど長い時間、廣渡さんの母親自慢に相槌を打っているのだ。

「それですね。うちのママの料理は格別で！ 君にもママの味をしっかりと覚えてもらいたいですよ」

「は、はあ……」

「そのためにも、早く我が邸に来て花嫁修業をしていただかないと。うちのママの足元にも及ばないとは思いますが、僕の妻として少しはうちのママのようにおしとやかで素敵な女性になっていただきたいですから」

永遠と続きそうなその話を制止しようと、私は頬を引き攣らせて話題を変えた。

「あ、あの。廣渡さん。今からお食事に行くと聞いておりましたが……。お時間は大丈夫ですか？」

「ああ、もうこんな時間ですか。すっかり話し込んでしまいましたね。では、行きましょう」

「……はい」

なんとか「ママ自慢」は阻止できたが、ここからまた苦行の時間が始まるのかと思うとウンザ

リだ。

だが、仕方がない。少しでも結婚時期を引き延ばすためには、廣渡さんのペースに合わせる必要がある。

会計を済ませた彼の後ろをついて行き、ゆっくりと歩を進める。そして、エレベーターホールまでやってきた。

私はエレベーターの前に立ちながら、今日何度目かわからないため息をこつそりと吐き出す。

廣渡さんが好んでいるのは和食だ。毎度彼が予約するのは、寿司や天ぷらなどの和食のお店である。

フランス料理やイタリア料理に連れていかれたことはないし、好みを聞かれたことも一度としてない。

マザコンに加え、ナルシスト、尚且つ自分本位の彼とは、死んでも結婚したくないとつい思ってしまう。

どう甘く考えても、私を愛してくれないと思えない。

そんな廣渡さんはエレベーターのボタンに手を伸ばし、上の矢印ボタンを押した。

それを見て「おや？」と首を捻る。よくよく考えれば、どうして彼はエレベーターの前で立ち止まったのだろう。

このホテルにある和食店は、今いる一階の割烹料理店一店舗のみ。エレベーターに乗る必要はないはずだ。



まさか、今日は最上階のフランス料理店にでも行くのだろうか。

私はなんとなく嫌な予感がして、廣渡さんに声をかけてみる。

「あ、あの……廣渡さん？」

「なんですか？」

「今日は和食のお店に行かれないのですか？ 和食のお店はこのフロアにあるはずです」

割烹料理店の案内板を指差す私に、彼はフフフと意味深に笑った。

「今日は部屋を取ってあります。そこに料理を運ばせてあるので行きましょう」

「え……？」

まさかの返答に目を丸くしていると、廣渡さんが私の肩を抱き寄せる。

今まで彼が私に触れたことなんて一度もなかった。この行為に驚きを隠せない。

ますます目を丸くする私に、廣渡さんが大げさに驚く。

「何を驚くことがあるのですか？」

「だ、だって……！」

彼と婚約関係になったのは、二年前だ。その後、極力会わないように努力していたとはいえ、何  
度か食事をしている。

しかし、その食事の間、彼は自分と母親の自慢話ばかりで、私には興味がなさそうだったのだ。  
私の身体に触れたのも、今日が初めて。

なぜ、彼はいきなりこんな暴挙に出てきたのか。

意味がわからず硬直していると、彼はクツクツと肩を震わせて笑った。

「僕たちは婚約者同士ですよ？ それも二年も関係が続いています」

「……ええ」

不本意ではあるが、廣渡さんの言う通りだ。

素直に頷いた私を見て、彼は満足げな様子になる。

「君のお父様も、そして僕のママも、僕たちが結婚するのを待ち望んでいる」

「は、はあ……」

その認識も間違っではないだろう。だが、嫌な予感しかしない。

後ずさりしたくても肩を抱かれていてできないでいると、廣渡さんは真面目な表情で私の顔を覗  
き込んできた。

「瀬戸家の掟、僕も色々と聞いているのですが、一つ確かめたいことがあるのです」

「確かめたい……こと？」

ますます嫌な予感しかしない。

私が頬を引き攣らせながら聞くと、彼は満面の笑みを浮かべた。その笑みが気持ち悪すぎて、及  
び腰になる。

怯える私に、廣渡さんは手で口を隠し肩を震わせて笑い出した。

「ええ。伊緒里ちゃんのお家、結婚するまでは処女じゃないとダメだという決まりがあるのでしょ  
う？」

「っ！」

「そうなのでしょう？ 伊緒里ちゃん」

廣渡さんが言う。『瀬戸家の掟』は存在している。

結婚をする前の女子の性交渉は固く禁ずる」というのだ。

しかし、私は別にその掟があるから処女を守ってきたわけではない。残念ながら、そういう機会が今まで一度もなかっただけだ。

家の監視下で生活していたので恋人を作ることは不可能だった。男性と話す機会のなかった私が恋をするなんて無理に決まっている。

もちろん、純潔を散らすなどさらに困難だ。

口を閉ざしていると、廣渡さんはフツツと意味ありげに笑った。

「君は処女で間違いないはずだ。そうだよね？ もし、違っていたら君はお父様に叱られる。勘当されるかな？ 格式高い家のご令嬢は、ひと味違いますねえ」

厭らしい視線を向ける彼が言っていることは事実だ。

ようやく社会人となり、男性と話せる環境に飛び込んだのに、そのときには家が用意した婚約者がいた。

それを無視して恋人を作るなど、私にはできない。恋人の存在を父が耳にしたら……その男性に色々な制裁を加えるだろう。

他人に話せば「何をそんなバカなことを」と失笑されてしまうかもしれないが、うちの家はやる

だろう。

それが、瀬戸家だ。

それに、もし私が他に恋人を作ったこの婚約を破談にした場合、痛手を負うのはうちの家族だ。

古くさい考えを押しつけてくる父や母、そして兄だが、私にとっては大事な家族。

こちらから破談にはできない。

未だに何も言わない私をジッと見つめていた廣渡さんだったが、腰を屈めて私の耳元で囁く。

「でも、本当ですか？」

「え？」

意味がわからず反応した私の肩を、彼は引き寄せる。

そして、とんでもないことを言い出したのだ。

「伊緒里ちゃんは、本当に処女なのですか？」

「は……!?!」

ストレートすぎる問いに、思わず声を上げた。

そんな私を見て、廣渡さんは真剣な面持ちでより強く私の肩を抱き寄せる。

彼から香るのはお香だろうか。和の香りは嫌いではないが、廣渡さんの香りだと思ふと嫌いになりそう。

慌てて彼の腕から逃げようとしたのだが、グイッと力強く戻された。

「っやあ！」

「伊緒里ちゃんは、僕のお嫁さんになるのですよ？ これぐらいで恥ずかしくてどうするのですか？」

恥ずかしくていいのではない。嫌がっているのだ。

だが、自分を嫌うはずがないと思いついて入っているナルシストに、私の気持ちなど伝わるわけがない。嫌悪感と一緒に恐怖も押し寄せてくる。震えている私に、廣渡さんは小さく笑い出す。

「ママがね」

「え？」

「確かめてこいって言うのですよ。伊緒里ちゃんが処女かどうか」

「は……？」

何を言い出したのか、この男は。

今までも充分理解不可能なことを言っていたが、さらに不可解な言葉が飛んできた。

唇を戦慄かせている私に気がついていないのか、彼はクスクスと楽しげに笑う。

「僕にはね。こんなに初めで男に免疫がなさそうな伊緒里ちゃんを見れば、処女だって丸わかりではあるのですけどね」

そうだ、そうだ。その通りだ。私は必死に何度も首を縦に振る。

処女か、処女じゃないか。その辺りのデリケートな部分を人様に伝えたくはない。

だが、今、しっかりと伝えておかなければおかしなことになるそうだ。それを肌で感じる。

私は必死に廣渡さんの言葉に頷いたのだが、それで事は収まってはくれなかった。

「でもね、ママが言うのですよ。処女じゃないなら、遊びまくっている女だから結婚はやめた方がいいって。だから、伊緒里ちゃんが処女かどうか、確認をしくちやいけないと思うのですよ」

「えつと……大丈夫です。私、男の人と付き合った経験はないです」

恥を忍んで言い切る。そうでもしなければ、処女かどうか確認をされてしまう。

どんな方法で確認するのかわからない。いや、わかりたくもない。

今は恥ずかしくている場合じゃない。とにかく私の身体に男性が触れた過去はないという事実をアピールするべきだ。

このままでは、結婚する前にマザコン男に押し倒されて抱かれる。それだけは、絶対に、絶対に嫌だ！

私は、「うふふ」と上品に笑ってごまかす。だが、そんな私を見て廣渡さんは口角を妖しげに上げた。

「どうせ、僕と結婚すればセックスするのですし。処女を今、僕が奪っても構わないでしょう？」

「か、か、構いますよ。廣渡さんは、瀬戸家の掟をご存じなんですかね？ 清い身体のまま嫁ぐという決まりなんです。結婚前に性交渉は、ちよつと……」

なんとか思いとどまらせようと必死になるが、彼はしつこい。ママの言いつけを守ろうと必死の様子だ。

「でも、本来ならすでに僕たちは結婚しているはずだったので。あるとき結婚をしていればとっくの昔に伊緒里ちゃんの処女は僕がいただいていた。だから、伊緒里ちゃんのお父様も許してくれ

るでしょう。なんと言つても、二年前婚姻を結ぶ予定だったのに、瀬戸家のお願いをうちが聞いてあげたのですから」

「っ！」

それを言われると、正直痛い。グツと押し黙る私に、廣渡さんは強気の姿勢を見せる。

「これ以上、廣渡家は瀬戸家を待たせません。きつと伊緒里ちゃんのお父様も僕と君の子供を早く見たいと思つているに違いない。少しぐらい早くなつたつて、誰にも文句は言わせませんよ」

「……っ！」

「僕が言わせない」

廣渡さんの目は真剣だった。冗談の欠片かけらもない。

これは絶体絶命の大ピンチだ。

なんと言つても「ママの命令」に逆らえる彼ではない。

とにかく私は彼から逃げることを考えよう。そして、何がなんでも破談にしてやる。

家を困らせたくなないと、ここまでどうにかやり過ごしていたが、やはり無理なものは無理なのだ。

それに、今回の廣渡さんの問題発言を知れば、父も考え直してくれる可能性がある。

マザコン男に一生を捧げるなんて、絶対に嫌だ。ついでに、息子がかわいくて仕方がないと思つている義母のもとに行くのも死んでもお断りである。

ポーンとエレベーターの到着を知らせる音がホールに響く。ゆっくりと扉が開くと、「さあ、行きましようか」と廣渡さんが私の背中を押してきた。

このままエレベーターに乗り込んだら、最後だ。客室フロアはこのロビーに比べて人気がない。そうしたら、助けを乞うことは不可能。今しかない。

意を決して廣渡さんに体当たりをすると、彼に隙が生まれた。今だ！

私は一目散にロビーへ走る。フロアは毛足の長いフワフワの絨毯じゅうたんで覆おおわれているため、ヒールの高い靴では走りにくい。ただ、足音を気にすることなく小走りできる。

今の私は、足音にまで気を回せない。

ロビーを突き抜け外に出て、ロータリーで待機しているであろうタクシーに飛び乗ろう。

けれど、足がもつれる。気ばかりが焦あせって身体がうまく動かない。

「伊緒里ちゃん、待ちなさい」

廣渡さんが、こちらに向かつて走ってくるのが見えた。

ようやくロビーまでたどり着き、タクシーが停まっているであろうロータリーまであと少し。

ここで捕まってしまうのか。

(もう、ダメだ!!)

目を瞑つぶろうとしたその瞬間、誰かにぶつかつた。

このままでは、廣渡さんに捕まる。絶望する私の頭上から聞き覚えのある声でした。

「何を鬼ごっこしているんだ？ 伊緒里嬢は」

「え？ 上総くん!？」

慌あわてて見上げたそこには、幼なじみの上総くんがふてふてしい顔で立っていたのだ。

彼の秘書である井江田さんも一緒にいる。

彼も私と面識があるため、私の姿を見てメガネの奥の目を見開いていた。

二人がスーツ姿でここにいるということは、このホテルで商談をしていたのかもしれない。

こちらを見て顔を顰めている上総くんを、私はじっと見つめる。相変わず誰もが振り返るほど格好いい。

仕立てのいいオリエンタルブルーのスリーピーススーツを悔しいほど素敵に着こなしている。

スポーツ万能な彼の身体は、しなやかで尚且つほどよく筋肉がつきとてもキレイだ。

意思の強そうな瞳、形のいい唇、眉もキリリとしている。緩くウェーブがかかった黒髪は、後ろに流されていた。

二年経つてますます大人の色気を感じる。

女性たちの視線があちこちから飛んでくるのも、いつものことであろう。彼は慣れきった様子で涼しげな顔だ。

現在二十九歳の彼は経済界の重鎮と言われる祖父を持つ、世界屈指の貿易会社の御曹司だ。

有名大学卒業後、アメリカでMBAを取得。最近までニューヨーク支社で働いていたのだが、つい先日帰国したと彼の母親から聞いていた。

久しぶりの再会が、まさかこんな状況では……ばつが悪いこともあり、つい険のある言い回しをしてしまう。

「なんでこんなところに上総くんがいるの!？」

「それはこちらのセリフだな。二年ぶりに会う人間に対して、失礼なヤツだ」  
「フンと鼻で笑ってあしらう様子が、また私の怒りを煽る。」

それにしても、私を見るなり顔を顰めるのはやめていただきたいかった。

今日は私にとって厄日らしい。

世界一会いたくない男と、世界一いけ好かない男。曲者二人にこんな短時間で会うなんて。

上総くんの腕の中に飛び込む形になっていた私は、慌てて彼から離れようとした。そこで背後から廣渡さんに声をかけられ、そのまま硬直する。

「伊緒里ちゃん、逃げてでも無駄ですよ」

「っ!」

上総くんの腕の中で身体が震える。

その状態で廣渡さんに背中を向けていると、彼は私の肩に触れてきた。

その瞬間、身体中に鳥肌が立つ。嫌悪感しかない。触られるだけでも嫌だ。  
慌てて肩に乗っていた廣渡さんの手を払ったが、これからどうしよう不安が押し寄せてくる。

このまま廣渡さんのもとに戻されれば、ホテルの一室で抱かれてしまう。そんなのは絶対に嫌だ。断固拒否である。

だが、もし今、なんとか逃げ切ったとしても、いつ彼に押し倒されて処女を奪われるかわかったものじゃない。

そんな事態になれば、即結婚だ。

だが、これほどまでに嫌悪感を抱くようでは、結婚なんてできるわけがない。新婚生活初日から破綻するのは目に見えている。いや、考えただけでおぞましい。

そんなふうには震えていると、頭上から「伊緒里？」と上総くんの声があった。彼の顔を見上げると、眉間に皺を寄せてこの状況を不審がっている。

いつもの私なら、こんなふうには長い間彼の腕の中にいるなんて考えられない。

だからこそ、上総くんも私の行動に驚きを隠せないのだと思う。

何も言い出さない、そして動き出さない私に対して廣渡さんが焦れてきた。

「伊緒里ちゃん、早くその男性から離れなさい。彼に失礼でしょう」

確かに、見知らぬ誰かの腕の中にならずにいるのは失礼だろう。しかし、私と彼は犬猿の仲とはいえ、昔からの知り合いだ。

かつて私は上総くんを兄同然に慕っていたのである。あの頃ならば、こんなふうにくっついていてもおかしくはなかったかもしれない。

「伊緒里？」

上総くんも何やら思うところがあつたのか、小声で私に問いかけてきた。

年上らしく、心配そうな表情で見つめてくる上総くん。そこには、昔の面影が見え隠れしている。

昔、慕っていた彼がそこにいるように感じて、私は後先考えずに口走っていた。

「ごめんなさい。この人……私の彼氏なんです！」

上総くんの目が大きく開く。彼の驚きに満ちた表情を見て、申し訳なさが込み上げてくる。

だが、背に腹はかえられない。どんな手を使っても廣渡さんから逃げ切つてやる。

嘘八百を言い出した私に、我に返つた上総くんが驚きの声を上げようとした。けれど、それは廣渡さんの声で掻き消される。

「は？ 何を言っているのですか、伊緒里ちゃんは」

私は開き直つて廣渡さんの方を向いた。そして、自ら上総くんを抱きついて叫ぶ。

「私、家族に内緒でこの人と付き合っているんです！ この人に、何度も抱かれています！」  
場の空気がピンと張り詰めたものに変つた。ここまできたら嘘をつき通すしかない。

貞操の危機だ。なんと少しでも乗り切らなければ。

しかし、問題は上総くんだった。彼が「何を言っているんだ？ 俺とお前は付き合つてなんかないだろう」などと言い出せばアウトである。

彼にはなんとかこの空気を読み取ってもらい、黙っていてほしい。

いけ好かないが、頭のいい人である。私の発言の意図を汲み取ってくれるはずだ。そう、信じている。

チャリと視線を向けると、上総くんは小さく鼻を鳴らした。どうやら、この茶番に付き合つてくれるつもりらしい。

（ありがとう、上総くん！）

借りを作るのには不本意であっても、廣渡さんとの縁談をご破算にすることが最優先である。

これは賭けだ。ここでうまく嘘をつき通せれば、廣渡さんに処女の確認をされることもなく、結

婚もしなくてよくなるはず。一石二鳥だ。

知らず知らずのうちに、手のひらに嫌な汗をかいている。ギュッと手を握りしめ、私は真剣な面持ちで廣渡さんを見つめた。

彼は一瞬驚いた表情になったが、すぐに肩を震わせ始めてクツクツと笑い出す。

ポカンと口を開けて彼を見守る私に、さもおかしそうに指摘する。

「ハハハ、ご冗談を」

「え……？」

呆気に取られていると、廣渡さんは意地悪な表情を浮かべた。

「どう見ても、伊緒里ちゃんは男を知らないでしょう？」

「な!？」

目を見開いた私を見て、彼は口元を着物の袖で隠してクスクスと笑う。そして、肩を竦めた。

「ママは伊緒里ちゃんが処女かどうか確かめろと言っていましたけど、確かめるまでもありませんよね」

それなら確認しないでください、と心の内で悪態をつく。

私が処女だと確信している様子の廣渡さんに反論しようとしたが、そこで私の身体は竦んでしまった。

廣渡さんが再び私に手を伸ばしたのだ。

このまま捕らえられれば、このホテルの一室で何もかもを奪われる。

誰にも触れられていない身体も、未来も、全部——

もう、ダメだ。ギュッと目を瞑ると、目尻に溜まっていた涙が零れ落ちそうになった。

身体を硬直させて地獄へのカウントダウンを始めた私だったが、ふいにぬくもりに包まれる。

廣渡さんのぬくもりなのかと、恐る恐る目を開く。なんと私は、上総くんが背後から抱きしめられていた。

目の前では、廣渡さんが嫌悪感を剥き出しにしている。

上総くん、と声をかけようとした私だったが、彼の背後に強引に押しやられた。

チラリと見えた横顔には、営業用の笑みを浮かべている。完璧な御曹司の顔をした彼からは、自信と気品が溢れ出していた。

猫被りがうまい彼ならではの顔だ。親切にも私を救ってくれるのだろうか。

上総くんは、不愉快な様子を隠しもしない廣渡さんに小さくほほ笑む。

「これは、これは。廣渡流、次期家元の雅彦さんではないですか」

「……貴方は？」

「申し遅れました。私、桐生コーポレーション専務をしております。桐生上総と申します」

さりげない仕草でスーツの内ポケットから名刺を取り出すと、廣渡さんに差し出した。

ふて腐れた態度でそれを受け取った廣渡さんに、上総くんは人のいい笑みを崩さない。

「貴方のお父様、家元とは、よくパーティーでお会いしてご挨拶させていただきます」

「そ、そうでしたか……」

上総くんが自分の父親と知り合いで、何より大手貿易会社の御曹司だと把握したのだろう。廣渡さんの表情は、少しだけ柔和なものに変化する。

そんな彼の様子を確認し、上総くんは胡散臭い恋愛伝道師みたいな表情で指南をし始めた。

「廣渡さん。女性はデリケートですよ」

「は？」

「そんなふうに、ストレートに身体を求めては逃げてしまう」

苦虫を噛み潰したような表情の廣渡さんに、上総くんは得意満面な様子だ。

その独壇場を見ていた私に、彼は一瞬視線を向けてきた。

どうしたのかと首を傾げると、上総くんは再び廣渡さんに視線を戻す。

「押しダメなら、引いてみる。引いてダメなら、押してみる。恋愛の鉄則ですよ。こんなふうに油断しているところを突いたりしてね」

上総くんらしいプレイボーイな発言だなあと暢気に構えていた私は、そこで大いに慌てた。急に振り返った彼に腕を掴まれたと思ったら、そのまま引き寄せられ、そして――

「ふっ……んん!!」

唇に柔らかく温かい何かが触れている。

これはもしかして、もしかしくなくても……上総くんの唇？

生まれて初めての体験に、頭の中が真っ白だ。

目を見開いたまま、それもホテルのロビーのど真ん中でのキス。家が決めた婚約者の前で、犬猿

の仲の男と。

このとんでもないシチュエーションに、私の頭からは言葉が消え失せた。

ゆっくりと唇が離され、上総くんと視線が絡み合う。

ここまでの流れで、私の現在の状況を彼は把握しているだろう。もしかしたら嘲笑われるかもしれないと、最初は怖かった。

しかし、上総くんに私をバカにしている様子はない。むしろ、どこか心配そうにしているように感じるのは気のせいだろうか。

「――失礼」

上総くんの言葉で、ハッと我に返る。それは目の前でキスを見せられていた廣渡さんも同じだったらしい。

廣渡さんが何かを言う前に、上総くんは私の腕を掴み颯爽とその場を後にする。

彼に引きずられてホテルを出ると、ロータリーに横付けされた車があり、運転手が私たちを見てドアを開けてくれた。どうやら、上総くんが所有している車らしい。

躊躇している私を、彼は強引に後部座席に押し込む。

そして戸惑っている私の横に乗り込み、運転手に「出して」と言って座席に背を預けた。

運転手は小さく頷いて、車をゆっくりと発進させる。

呆気に取られていた私だったが、ようやくこの状況を理解して我に返った。

咄嗟に出た言葉は、「秘書の井江田さん、置いてきて大丈夫!」だ。それを聞いた上総くんは



プツと噴き出した。

「第一声がそれかよ。相変わらず優等生なんだな」

「だ、だって！ 置いてきちゃったのよ？ 申し訳ないわ！」

むきになって言う私に、彼は鼻を鳴らす。

「井江田は大丈夫だ。今、あの男の処理に動いているだろう」

そして、ふうと息を吐く。その様子に私は黙り込んだ。

上総くんの秘書、井江田さんにもだし、何より上総くんに迷惑をかけている。それを思うと、居たたまれない。

身体を小さく縮こまらせていると、再び上総くんが口を開いた。

「さっきのあの男……」

「え？」

「お前の婚約者なんだろう？ また、癖の強いヤツが選ばれたよなあ」

それはうちの両親——特に父親に言っただけ。私は力なく頷く。

上総くんも言っているが、廣渡という男は本当に癖が強い。

見目は和風美男子といった雰囲気なので、お弟子さんからの人気は高いと聞いたことがあるが、蓋を開けてみれば自意識過剰のナルシストの上、お母さん命のマザコンなのだ。

穩便に婚約破棄をしたいと何度か父に訴えたこともあったが、聞き入れてはくれなかった。

どうにかして政略結婚を白紙にできないか、考えているだけで何もしていなかった。そのツケが、

回ってきたのだろう。

まさか、私に触れる素振りもなかった廣渡さんが、処女かどうかを確認しようとするなんて想像すらしていなかった。

それもこれも全部廣渡さんのお母さんのせいだ。自分の息子がかわいくて仕方がないのなら、嫁を迎えようなんて考えなければいいのに。

際限なく不平不満が出てきそう、私は慌てて口を噤む。その代わりに、上総くんに謝罪した。

「上総くん、ごめん。私の個人的なことに巻き込んでしまった」

何も言わない彼の横顔を見て、申し訳なさに頭が垂れる。

今回の件については、上総くんに関係がないことだ。

勝手に私の恋人に仕立てられ、何度も抱かれていたなんて大嘘をつかれた。彼が怒っても仕方がない。だけど……

疲れた様子で流れる車窓の景色を見ている上総くんに視線を向け、私は唇を尖らせた。

「申し訳ないと思っただけ……どうしてキ、キ、キスしたのよ！」

今回彼を巻き込んでしまったのは、本当に申し訳ないと思っただけ。だが、先ほどのキスの件は別だ。

話の流れから仕方がなかったのかもしれないが、ホテルのロビーのど真ん中、それも周りに人がたくさんいた。

そんな場所でキスする必要が本当にあったのだろうか。

いや、ない。絶対に必要なかったはずだ。

今回上総くんには助けられたけど、キスについては反論したい。

ムツと頬を膨らませていると、彼はチラリと私を見て意地悪く笑う。

「なんだよ、伊緒里。お前は俺のキスより、マザコン男とセックスしたかったのかよ」

「うっ……」

それを言われると何も言い返せない。言葉に詰まっている私を、上総くんはフンと嘲笑う。

「どう考えても、俺とのキスの方がいいだろう？」

「……っ」

「しようがなく助けてやったんだから、ブツブツ文句を言うな。キス一つぐらいで」

「キス一つぐらいですって!？」

けれど、この言葉にはカチンときた。

彼みたいに女をとつかえひつかえしていそうなりア充男にとっては、キスなんてどうってことないのだから。

軽い挨拶あいさつなのかもしれない。

だけど、私にしてみたら違う。

キスは愛を伝える大事な儀式だ。とても大切にすべき行為の一つだと考えている。

上総くんの言い分には納得がいかない。

それに彼にとっては、数あるうちの「キス」なのだろうけど、私にとっては後にも先にも、一生

に一度しか経験ができないファーストキスだったのだ。

そんな軽はずみな扱いされたら納得できない。

怒りに身体を震わせていると、隣に座っていた上総くんが不思議そうな表情になった。

「何をそんなに怒っているんだ？」

その発言。火に油を注いでいるというのに、どうして気がついてくれないのか。

しかし、あまり反発していると、先ほどのキスが私のファーストキスだとバレしてしまう。それは嫌だ。

この年までファーストキスを守っていたと知れば、彼はきっと腹を抱えて笑うだろう。

そんな屈辱、受けたくはない。

「さすがは堅物優等生、伊緒里だ」なんて言ってバカにされそうである。

それが予想できるからこそ、絶対彼には知られたくないのだ。

言いたいことをグググッと吞んで怒りに震えている私を見て、上総くんはますます不思議そうな顔をする。

だが、すぐに呆れた表情に変わり、バカバカしいといった様子で肩を竦めた。

「まあ、いい。とりあえず、桐生の家に行くぞ」

「え？ 上総くんの実家？」

このまま瀬戸家に送り届けられるか、私のマンションにでも行くのかと思っていた私は、驚きの声を上げる。

そんな私を見て眉を上げた上総くんだったが、すぐに視線を逸らした。

「ああ。伊緒里のことは、母さんから色々聞いてはいた」

「あ……」

上総くんのお母さん、真美子さんと私は昔から仲がいい。

上総くんの家、桐生家の子供は上総くん一人。そのせいかな、真美子さんは昔から私をかわいがってくれているのだ。

今も定期的に連絡を取り合っていて、最近の話題はもっぱら私の結婚についてだった。つまり、真美子さんは何もかもを知っているのである。

そして、私の現状を心配してくれているため、息子の上総くんにも話していたのだろう。

だからこそ彼は、あの状況で何もかもを理解して助けてくれたのかもしれない。

「とにかく、家に来い。母さんに相談してみろよ」

「う、うん」

慌てて返事をした私を見ることもなく、上総くんは再び車窓の外に視線を向ける。

相変わらずの塩対応だ。それは、私の態度も同じではあるのだが……なんだか少し寂しく感じるのは気のせいだろう。

ふと、ロビーでの一件を思い出し、唇に触れてみる。

未だにあのときの熱と感触が残っていて、顔が熱くなってしまう。

(あ……そういうことか)

私は納得して俯く。どうして上総くんは塩対応に寂しさを覚えたのか、理由がわかった。

キスに対しての温度差のせいだ。

私は先ほどのキスに戸惑い動揺しているのに対し、上総くんは何事もなかった様子。だから、なんとなく寂しさが込み上げてきたのだ。

ファーストキスだったのに、こうも相手と気持ちの差があるのは、やっぱり悲しい。とはいえ、彼に同じ熱を求めても仕方がないだろう。

私は上総くんに嫌われているのだから。

彼にしてみたら、嫌いな女にキスをして助けてやったという認識のはずだ。

それにしても、いつから上総くんは私を避けるようになったのだったか。

何か原因があったかもしれないし、なかったのかもしれない。しかし、いずれにしても現在の私たちの間柄は犬猿の仲で間違いないと思う。

そういえば、私たちの関係がギクシャクし始めてから、父が私の前で桐生家の話をすることがなくなってきた気がする。

子供たちの関係が悪化しているのをどこかで知って話題に出さなくなったのだろうか。

こっそりと上総くんは横顔を見た私は、また唇を尖らせた。

助けてくれて嬉しかった、なんて絶対に言ってやらないと心に誓う。そして彼に背を向けて、彼と同じく流れる景色を見つめ続けたのだった。

私たちを乗せた車は桐生家の門扉をくぐり、広大な敷地の庭をゆつくりと進んでいた。実家の瀬戸家が純和風とすれば、桐生家は洋風スタイルである。

ローズガーデンのアーチをくぐり、どこかのホテルかと思間違えるほど洒落た屋敷に車が横付けされた。

上総さんに促されて車を降りると、すぐさま昔馴染みの家政婦さんが飛び出して来る。

久しぶりに桐生家に顔を出した私を見て歓迎してくれたかと思うと、さらに上総さんの母親である真美子さんまで嬉しそうに駆けつけてくれた。

「あらあ、珍しい組み合わせね」

「こんにちは。突然お邪魔してしまいました、すみません」

「何を言っているのよ、伊緒里ちゃんは。貴女なら、いつでも大歓迎よ」

フツツとキレイにはほほ笑む真美子さん。相変わらずの美しさに、思わず感嘆のため息が零れる。

ウェーブのかかった栗色の髪は、彼女の艶をより際立たせた。

鮮やかな真つ赤な口紅に負けない魅力が彼女にはある。

身体にフィットしたマキシ丈のワンピースを着こなす抜群のプロポーションだ。

真美さんは五十代後半のはずなのに、どうしてこんなに美しさを保てるのだろうか。

こんな素敵な女性になりたい。そう心から私が思っている女性の一人でもある。

ウツトリと真美子さんに魅入っていると、彼女はニヤニヤとどこか楽しげに笑った。

「いつもいがみ合っている二人が、こうして肩を並べて我が家にいるなんて。何年ぶりかしらね。

感慨深いわあ」

シャンデリアや大きな絵画がいくつもあり、この時期には使われていない薪ストーブがある広々とした応接間だ。そこに案内された私と上総くんを見て、真美子さんはとても嬉しそうにしている。

しかし、残念ながら友情を深めたわけではなく、仲が良くなったというでもない。

ここに来ることになった経緯を、私からはなんとなく話しくい。

どうしても上総くんからされたキスを思い出してしまうせいだ。

挙動不審な私に呆れた様子で、上総くんが小さく息を吐き出した。

「俺から説明する。伊緒里に婚約者がいるってことと、そいつとの結婚に乗り気じゃないということとは母さん知っているだろう？」

「それはもちろん知っているわよ。だから、この前上総にどうにかならないかしらねって相談したでしょ？」

「ああ。それで——」

彼は、先ほどホテルであった出来事を順を追って真美子さんに話していく。

すると、最初こそ神妙な顔をして聞いていた真美子さんが、段々と目を輝かせ始めた。

「やだ！ ちょっと、素敵じゃない」

「え？ どこが素敵なんですか!?」

黙っていた私は、すかさず口を挟んだ。

廣渡さんにされたセクハラ紛いの言動を素敵だとはどう見積もつても言えないと思う。

憤慨する私に、真美子さんは慌てた様子で首を横に振った。

「伊緒里ちゃんの婚約者が素敵って言っているわけじゃなくて。うちの息子が、窮地に追い込まれた伊緒里ちゃんを助けたんでしょ？」

「えつと……まあ、はい」

頬を真っ赤に染めて興奮気味に詰め寄ってくる彼女に驚き、私は返事をする。そこで彼女は立ち上がり指を組んでターンを決めた。

「ああ！　なんて素敵なおおお！　ドラマや映画の世界じゃない！」

クルクルとターンをしながら、ついに感涙にむせび始めたではないか。慌てる私に、上総くんが「聞き流せ」と言ってくる。

だが、その言葉が真美子さんの耳に入ってしまった。

「何か言ったかしら？」

威圧的な態度の彼女に、上総くんはそっぽを向いて無言を貫く。

母親に逆らうと後々大変なことになるとわかっているのだ。さすがは息子である。

無視を決め込む彼を鼻であしらい、真美子さんは悶え始めた。

「あー、もう！　私もその場所にいたかったわあ。誰か録画してくれていないかしら。防犯カメラをチエックさせてもらうとか？」

勘弁してくれ、と頭を抱える上総くんを見て、私も大いに慌てる。

真美子さんは、やると言ったら本当に実行に移す人だ。

どうやって彼女を諦めさせるか。私は必死に考えつつ、上総くんに視線を向けた。

彼も母親の暴走をどう止めようか考えている様子だ。

だが、残念なことに真美子さんを止める術は見つからない。

この桐生家の陰のボスである彼女は、大企業の社長である上総くんのお父様であつても止められないのだ。それを、小さい頃からかわいがつてもらっている私はよく知っている。

無理やり止めようとすると、墓穴を掘る可能性が高い。

一番彼女に知られたくないのは、上総くんに強引にキスをされたことだ。

日頃より、『そんな婚約者、さっさと切っちゃって、うちのバカ息子にしない？』と本気なのか冗談なのかわからないことを言っている真美子さんの耳に入ったら……恐ろしい未来がやってくる。

ここは静かに彼女の熱が冷めるのを待つのが得策だ。

しかし、そこで上総くんの秘書、井江田さんが笑いながら応接間に入ってきた。

私が頭を下げると、にこやかにほほ笑んで指で丸を作る。どうやら廣渡さんの件をうまく処理してくれたらしい。

ホツとしたのもつかの間、彼はとんでもないことを言い出したのだ。

「ハハハ、奥様。私はその場にいたのですが、残念ながら動画を撮り忘れておりました」

「あら、井江田くん。そんな素敵なシーンは、しっかり撮っておいてくれなくちゃ」

「申し訳ありません。ですが、私はいいいモノを見てしまいましたよ」

ニヤリと笑う井江田さん。その様子を見て、上総くんは慌てた様子で立ち上がった。

だが、井江田さんが満面の笑みで言い放つ。

「上総さんが、伊緒里さんにキスをしているところを」

「まあああああ!!」

私と上総くんの顔を交互に見て、歓喜の声を上げる真美子さん。

上総くんは「好きにしてくれ」とばかりに肩を落とし、一方の私は恥ずかしさのあまり彼女から顔を背けた。

一番知られたくない、知られてはマズイことが真美子さんの耳に入ってしまった。

井江田さんに恨みごとを言いたいところではあるが、廣渡さんとの後処理をしてくれた手前、文句をつけられない。

ただ、羞恥に耐えていると、真美子さんが突然ポンと手を叩いた。

「ほら、やっぱり。上総と伊緒里ちゃんが結婚しちゃえばいいのよ」

「は？ 何言っているんだ!」

大声で反論する上総くんに、彼女は冷ややかな目を向ける。

「貴方こそ何を言っているのかしら、このバカ息子は。結婚前の女性に手を出しておいて、よくもまあ平気な顔をしていたわね」

「つ……手を出したなんて人聞きの悪い、手助けしただけだ」

「ふーん、手助けねえ。アンタの口をもつてすれば、キスしなくたって伊緒里ちゃんの窮地を救えたんじゃないかしら?」

「っ!」

確かに、真美子さんの言うこともわかる。

上総くんは昔から聡明で、口も達者だ。だからこそ、大企業の第一線で活躍できている。

彼にかかれれば、あの場面でもっと違う手が打てたはずだ。

けれど、上総くんはフンと鼻を鳴らしてそっぽを向いた。

「うるさい。あのセクハラ男がむかついたからひと泡ふかせてやろうと思ったただけだ。伊緒里のためじゃない」

キツパリと言い切る彼は、なんだかちよつと頬が赤い気がする。

恐らく、廣渡さんのセクハラぶりは、上総くんにとつても目に余るものだったのだ。

昔は仲が良かった私のことを、彼なりに考えてくれた結果なのだと思う。

(……仕方がない。キスのことは許してあげよう)

そんなふうにした矢先だった。真美子さんが、私のトップシークレットを口走ってしまふ。

「何を言っているのよ。伊緒里ちゃんは、アンタとのキスがファーストキスだったのよ!」

「真美子さん!!」

立ち上がって真美子さんの口を手で塞いだのだが、すでに遅い。上総くんが目を丸くして固まっている。これはバッチリ真美子さんの問題発言を聞いてしまったようだ。

頭を抱える私を、彼は啞然とした様子で見つめた。

「瀬戸家の掟は聞いたことがあるし、あのセクハラマザコン男も言っていたから処女だとは思って

いたけど……マジかよ」

「……っ」

恥ずかしくて居たたまれなくなる。

この場から逃げ出したいのに、真美子さんに腕を掴まれていて身動きが取れない。

「あ、あの……真美子さん。私、これで失礼」

彼女は私をガツシリとホールドすると、妖艶ようえんな笑みを浮かべる。

その笑みはキレイなのに、背筋が凍るほど恐ろしい。

抵抗するのは無理だと悟る私と、未だに啞然あざむとしてしている上総くんは、彼女は言い放った。

「貴方たち、このまま結婚しちゃいなさい」

「っ！」

「何を言い出すんだ！ 母さん」

驚きすぎて言葉が出ない私に代わり、上総くんが反論してくれる。だが、真美子さんは上総くんをギロリと鋭い視線で睨ねめつけた。

「清いままの伊緒里ちゃんに手を出したのは誰？ マザコン婚約者じゃなくて、アンタよ、上総」

「……っ」

「今から瀬戸家に向いて、責任を取って伊緒里ちゃんを嫁に貰もらいたいとお願ねがいしていらっしやい!!」

般若面はんにょめんのような形相の真美子さんに、上総くんと私は猛抗議する。

「ちよっと待て、母さん。なんで伊緒里と結婚なんていう話になるんだ？」

「そうですね、真美子さん！ 私、上総くんと結婚するなんて無理です！」

「ああ？ こっちだつて願ねがい下げだ」

「私だつて！」

犬猿の仲らしいやり取りを繰り返すと、真美子さんがテーブルをダンと勢いきよく叩たたいた。

目を丸くして口を閉ざした私たちを、ギロリと睨にらみ付け腕組みをして顎あごをしゃくする。

一気に周りの温度が下がった。私はゴクンと生唾を呑み込む。

「じゃあ、伊緒里ちゃんはこのままマザコン男と結婚しなさい。そして、上総。アンタは見合あひあい決定」

「な……それは、ちよつと!!」

「なんで俺まで、伊緒里のとばつちりを!!」

ギャンギャン再び抗議を続ける私たちを、真美子さんは耳を押さえて「うるさい！」と一喝いっかくする。

「じゃあ、こういうのはどう？ 上総」

「は？」

「伊緒里ちゃんとマザコン男との婚約を解消させることができれば、貴方に来ている縁談を全部白紙にしてあげる」

真っ赤な口紅を塗っている真美子さんの口角がクイツと上がる。それを見て、上総くんは身を乗り出した。

「本当だな！ 二言はないな!」

「ええ。約束してあげるわ」

大きく頷く真美子さんを見て、やる気をみなぎらせている。

私の縁談を潰してくれるのなら、それほどありがたいことはない。

今日の出来事で、廣渡さんと夫婦になるのは生理的に無理だとわかった。だからどんな形であれ、婚約破棄ができる話には乗ってしまいたい。

しかし、上総くんにはあまり頼りたくないし、関わりたくもなかった。それは、私だけではなく上総くんもだろう。

それでも、真美子さんの挑発に乗ったということは、彼はかなりの数のお見合いを打診され、それを煙たがっているに違いない。

彼は、所謂ハイスペックな御曹司だ。見目もよければ、頭もいい。もちろん、仕事もできるらしい。

人当たりもいいし、彼に接したことがある人は口を揃えて「優しく聡明で素敵な人だ」と言う。違う顔を見せるのは私にだけなのだ。よほど私が気に入らないに違いない。

そんな相手に婚約破棄の手伝いを頼んだら、末代まで恩を着せられそうだ。それは避けたい。当たり前障りなく逃げよう。それがいい。そうしよう。

私は上総くんにもう一度考え直した方がいいと言おうとした。けれど彼は真剣な面持ちで私に言う。

「共同戦線を張るぞ、伊緒里」

助けを求めて真美子さんに視線を向けても、当然、美魔女な彼女は意味深にほほ笑むだけ。助けしてくれるつもりは毛頭なさそうだ。

そもそもこの提案は彼女が言い出したのだから、助けてくれるはずがない。

こうなったら開き直ろうと、私は腹を決めた。

マザコン男との縁談を破談にしたい私。そして、見合いにウンザリな様子の上総くん。

とにかく自由になりたいと思っている二人の意見は一致している。

期間限定で、目的達成のためにタッグを組むのもいいかもしれない。

私は諦めに似た気持ちを抱きつつ、「わかったわ」と承諾の返事をしたのだった。



「それで、どうして私の部屋に来る必要があるの？ 理由を教えてください！」

現在、私が住む1LDKのマンションに、なぜか上総さんと彼の秘書である井江田さんがいた。彼ら二人に促されるまま部屋に通してしまったのだが、どうしてこんな事態になっているのか。この部屋は、私がお一人様を楽しみ、仕事の疲れを癒やす大切な空間だ。

ページュを基調にナチュラルテイストの家具で統一し、私の好きなモノをギュッと詰め込んでいる。

そんな、ゆったりとした時間を満喫できるはずの部屋なのだが、今はのんびりなどしてられない。

私は背伸びして上総くんを睨み付けた。

しかし、上総くんからの反応は特になし。私はふくれっ面を引っ込められなくなる。

桐生家を訪れたあと、利害が一致した私と上総くんは共同戦線を張ることになった。

そこまでは納得している。だが、どうして私のマンションに二人が来る必要があるというのか。そこが理解できない。

男性を一度も上げたことのない我が部屋に初めて入る男性が上総くんなんぞ。

思わぬ事態に戸惑う。

しかし、そんな私の気持ちなど理解していないだろう彼は暢気なものだ。

マイペースに部屋を見回し続けている。

井江田さんはベランダに出て何かを確認したあと、私の部屋を出ていった。

二人きりになったマンションの一室。上総くんを意識してしまい、私はドキドキが止まらない。

挙動不審の私に比べ、上総くんはやはり気楽だ。

「伊緒里の会社からも近いし、なかなかいい所だな」

「まあね……。って、上総くん。あんまりジロジロ見ないで!!」

私の注意にも、彼は聞く耳を持たない。

レースのカーテンを開き、窓を開けた。気持ちのいい風が部屋にそよいでくる。

五月の風は、すっかり初夏めいている。

上総くんはそのままベランダに出ると、井江田さんがしていたようにマンション周辺の風景を見つめた。

「緑地公園に近いんだな」

「……うん」

私もベランダに出て、彼の隣で眼下を見つめる。

築十年、五階建てのマンションは大通りに面しており、最寄り駅からのアクセスも抜群にいい。

大通りを挟んで向こう側には、緑豊かな公園が広がっている。なかなかの広さを誇るその公園

はジョギングをする人たちもいるし、日中は子供連れのママさんたちの憩いの場にもなっているよ  
うだ。

たくさんの桜の木が植わっており、お花見シーズンになると満開の桜を堪能できる。

そこで花見をする人たちも多く、桜の木の下で宴会をしているのを何度か見たことがあった。

それに、辺りを一望できる高いシンボルタワーもある。遊具の一つとして、螺旋階段のついた展  
望台があるのだ。

そんななかなか大きな公園なので、休みの日は他県のファミリー層も遊びにやってくると聞いて  
いた。

公園付近には二十四時間営業のスーパーがあるし、ドラッグストアやコンビニ、ファミレスなど  
の飲食店も多く軒を連ねている。

そのため、この辺りはファミリー層がとても多く、比較的安全で、一人暮らしの私にはもってこ  
いの場所だ。

とはいえ、OLのお給料で借りているので、狭い1LDKである。

上総くんはその点が気になったらしく、オブラートに包まず遠慮なく聞く。

「それにしても、瀬戸家ご令嬢の部屋としては質素だな」

「質素って言わないでよ。これでも私のお城なの。自力で結構カツカツの生活しているんだから」

「へえ」

彼が興味深そうに私を見つめているのがわかったが、敢えてそちらに顔を向けずに公園を見つめ

たままで口を開く。

「私、本当は二年前に結婚する予定だったんだけど、どうしても独立して働いてみたくて。お父様  
に無理を言っただけで家を飛び出したの。だから、家からの援助はしてもらっていません」

就職して三年目のOLに、そんなに広くて立派なところは借りられない。そう主張すると、上総  
くんは目を見開いて驚いた。

「へえ……優等生な伊緒里が珍しい。親父さんの意見に刃向かったってわけか」

「優等生って。私、そんなにイイ子じゃないし」

「そうか？ 自分の意志を貫いたから、家に援助はしてもらわない。伊緒里は、そう思っているん  
だろう。そういうところが優等生だって言うんだよ。大方のお嬢様は、親の脛をかじりまくって  
いるからな」

「上総くん？」

驚いた。上総くんが、私をそんなふうに言ってくれるなんて思ってもいなかった。

隣に立つ彼に視線を向ける。爽やかな風を受け、彼の黒くてキレイな髪がサラサラと揺れた。

端正な横顔は、二年前よりもっと大人びていて男性なんだと強く意識させられる。

ふと薄く形のいい唇に視線が向いてしまい、ホテルでの不意打ちのキスを思い出した。

あの唇の感触が蘇ってドキドキする。私は、慌てて彼から視線を逸らした。

二人の間に、初夏の色が濃くなりつつあるそよ風が通る。その風を感じながら、私はただ頬を火  
照らせて公園を見下ろす。

しばしの沈黙のあと、上総くんがポツリと呟いた。

「伊緒里は、いくつになっても伊緒里だな」

「え？」

どういう意味だろうか。意味がわからず上総くんに向き直ると、彼は小さく笑う。だが、すぐに唇を横に引いて真剣な面持ちになった。

「この部屋、セキュリティはまあまあだな」

「え……うん。実家の関係で、セキュリティだけは万全な所を選べって口うるさく言われたから。探すのは大変だったけど」

父は国会議員だ。色々な面で注目され、好奇の目で見られることも多い。危害を加えられる可能性もある。

娘である私も用心するに越したことはない。それは昔から耳にタコができるほど言い聞かされていたので、住居は安全面を重視して決めたのだ。

上総くんは外の様子を見たあと、何も言わずに部屋の中に戻る。

そのピリリとした様子に、私も慌てて後に続いた。

部屋に戻った彼は腕組みをして、私に忠告する。

「確かにこの部屋に関してのセキュリティは安心だが、ここまでの道のりが危ういな」  
「え？」

外を指差し、険しい顔つきで続ける。

「最寄り駅までの道。確かに大通りに面していて人通りもある。道のりもさほど遠くはなく立地条件はいい」

「そうでしょう！」

自信満々で頷く私をチラリと見た上総くんだが、顔は未だに険しいままだ。その様子に、私は眉を顰める。

上総くんは窓の外を見て、堅い口調で言う。

「だが、あの公園が気になる」

「え？」

「大通りで犯行に及んだあと、公園へ逃げられたらどうする？」

「どういう意味？」

「犯行のあと容易に姿を隠す場所があるのは、犯人にしてみたら都合がいいだろう。それに、この距離なら木々の間に隠れて望遠カメラを使えば、マンションを監視できてしまう」

「っ！」

「何事にも完璧なんて存在しないものだ。これからは会社の行き帰り、気をつけろよ」

「う……は、はい」

コクコクと何度も頷く私に、彼は「さて」と気を取り直したように呟いた。そして、再び窓際に移動する。

またベランダに出るつもりだろうか。首を傾げていると、私を手招きした。